

## 上古漢語における指示詞の認識構造

西山, 猛  
九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授 : 言語環境学部門

<https://hdl.handle.net/2324/18271>

---

出版情報 : 中国語学. (236), pp.42-52, 1989-10-10. 中国語学会  
バージョン :  
権利関係 :



# 上古漢語における指示詞の認識構造

西 山 猛

中国語学 第236号 抜刷

中国語学会 平成元年（1989）10月10日 発行

# 上古漢語における指示詞の認識構造

西山 猛

(九州大学大学院)

It has often been asserted that Archaic Chinese has two sets of demonstratives, as do present-day Chinese and English.

However, the present author, in examining the text of the *Mencius*, concludes that Archaic Chinese has three sets of demonstratives, as do Japanese and Korean.

In this article the author attempts, by giving some examples from the *Mencius*, to describe the structure of demonstratives in Archaic Chinese.

- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| 1. 緒論                 | 2.2. 指示詞に関する調査結果  |
| 1.1. 指示詞の認識構造         | 3. 認識構造に関する仮説及び検証 |
| 1.2. 「古代漢語」の指示詞に関する研究 | 3.1. 認識構造に関する仮説   |
| 2. 上古漢語の指示詞に関する調査     | 3.2. 仮説に対する具体的な検証 |
| 2.1. テキストの選定          | 4. 結語             |

## 1. 緒論

### 1.1. 指示詞の認識構造

人間が言語という意思伝達手段を用いて事物を指示する場合、その指示詞による認識構造に多様な形態が存在することは、既に多くの文献に記述されている<sup>1)</sup>。例えば現代漢語においては、発話者の近くに存在すると発話者自身が判断した事物に対して使用される「这」と、発話者から遠くに存在すると判断した事物に対しての「那」との、二系統により指示詞が構成されると言われている<sup>2)</sup>。また例えば現代日本語では、発話者の近くに存在する事物に対して使用される「こ」と、対話者の近くに存在する事物に対しての「そ」と、発話者、対話者から共に離れて存在する事物に対しての「あ」との、三系統により指示詞が構成される<sup>3)</sup>。

この事象に関しては、中国語学研究においても、王力1945, pp. 46-60 につとに言及がある。該書においては「兩分法」、「三分法」という術語が用いられ、「兩分法」の例として古代漢語、現代漢語が挙げられ、「三分法」の例として、蘇州語、ベトナム語が挙げられている。

1.2. 「古代漢語」の指示詞に関する研究  
ところで、いわゆる「古代漢語」研究においてこの指示詞の認識構造は一般にどのように考えられてきたのであろうか？ まず、全体的な体系を有する文法書について概観してみることにする。

ここではとりあえず王力1981, pp. 351-367; 周法高1954, pp. 1-256; 太田1984, pp. 123-132; Dobson 1974, pp. 87-99 を概観することにするが、これらの書においては、名称や

下位区分、及び挙例の語等は若干異なるものの、指示詞の認識構造に関する記述は同一と見なしてよい。即ちこれらの書では、まず「代詞/代名詞/substitutes」の下位区分として「指示代詞/指示代名詞/demonstratives」があり、それをさらに「近称・遠称/近指代詞・遠指代詞/the near demonstratives・the far demonstratives」の二種に分けている。以上を要するに、「古代漢語」においては、指示詞は近称と遠称の二系統により構成されると一般には考えられているようである。

ところが「古代漢語」の指示詞の構造をこのように二系統であると仮定した場合、いくつかの問題が生じてくる。例えば黄盛璋1983を見てみると、この論考ではまず先秦漢語の指示詞を近指と遠指の二種に分け、次に共時的、通時的差異を十分考慮して詳細な記述を行っているが、論述に不十分な点がいくつか見られる。即ち論考中において「此」、「是」の語法上の区別は、考察が非常に難しい」と前置きしたうえで、「此」及び「是」の違いを考察しているが、結論として挙げてある「“於是”等は時間を表し、“於此”等は地点や状態を表す……」等の四つの語法上の区別<sup>6)</sup>は、ややもすれば曖昧或いは不正確という印象を免れない。

このような研究状況において、「此」と「是」の区別について新しい視点を与えるものに、まず鈴木直1981, 1982, 1983 a, 1983 bがある。例えば1982では、「是」は、古代漢語における近指の一種であって、「此」よりも、やや離れたものを指すのが、その指示詞としての本質的な機能であったということが出来る」とある。この論考では、「是」は基本的には「近指」と考えられ、三分認識という考え方こそ提出されてはいないものの、距離認識を語法上の区別の一つの基準とし、至近のものを「此」で指し、やや離れたものを「是」で指し、遠く離れたものを「彼」ま

たは「夫」で指すと述べられている。

次にこの考え方をさらに推し進めて、現代漢語諸方言との比較などから、「古代漢語」は三分認識ではなかったかと述べたものに、Ogawa 1980がある。この論考では、「このような三分指示詞の存在は、しかしながら、漢語の他の幾つかの方言についてののみ報告されるだけでなく、古代漢語についても推測がなされている。」とあり、そして松下 1930, pp. 99-107 が、山東方言との比較から、「古代漢語」には「近指」として指用される「此」等と、「遠指」として使用される「彼」に加えて、「是」が存在する、と記していることを指摘し、そして漢語はかつて指示詞は三分認識であったのであり、それがアルタイ諸語の影響で二分認識となった、と結論づけている<sup>6)</sup>。

この指摘は極めて啓発的な示唆であると考えられるが、しかし松下1930、或いはOgawa 1980においても、その三分認識の具体的検証は殆どなされておらず、またその構造の理論的な説明もなされていない。よってこの考え方は現在未だ広範な承認を得るには至っていないようである。

そこで本稿では以上の研究状況をふまえ、かつ論証の際には資料の均質性を十分に考慮し、理論については必ずデータに対する責任をとまらすべきであるという考えに立て、まず資料となるべきテキストを選定し、次にそのテキストをもとに具体的な調査を行い、そしてその結果に基づいて指示認識の構造についての仮説を立て、最後に具体例を挙げてその検証を行いたいと思う。

## 2. 上古漢語の指示詞に関する調査

### 2.1. テキストの選定

太田1984, p. ii につとに言及されるように、上古漢語を記述する際には、従来よくありがちであった雑然たる資料の恣意的な引用を厳に慎み、共時的、通時的差異を十分に考慮し、

一個の均質的資料を選定する必要がある。

今回は、後の文言のより規範たり得たものを一応の基準として、通時的区分を Dobson 1974, p. 9<sup>7)</sup>, 共時的区分を Karlgren 1951<sup>8)</sup> にそれぞれ求め、'Late Archaic Chinese', 'the 論—孟—檀 group' に設定することにする。そして実際の文献としては、『孟子』（四部叢刊初編所収清内府藏宋刊本）を資料とする。『孟子』選定の理由は、第一に、該書は時期設定と版本に比較的問題が少ないと思われるからであり、第二に、該書は問答体が主であるので、指示される事物と発話者、

〔図表1〕

資料対象	資料総数	調査総数
此	103	114
是	228	256
夫	31	177
彼	30	38
其	525	585
之	788	1899
斯	14	50
茲	3	4
厥	1	8

合計 1723 3131

〔其〕総数585 資料525  
非代詞及引用60

定語	525
----	-----

〔茲〕総数4 資料3  
非代詞及引用1

定語	2
賓語	1

〔此〕総数114 資料103  
非代詞及引用（通時的差異）11

主語	26
定語	19
賓語	58

〔夫〕総数177 資料31  
非代詞及引用146

主語	2
定語	29

〔之〕総数1899 資料788  
非代詞及引用1111

定語	1
賓語	787

〔厥〕総数8 資料1  
非代詞及引用7

定語	1
----	---

対話者との関係が明確に分かることにより、指示という事象が論じやすいからである。

## 2.2. 指示詞に関する調査結果

前掲の文法書等で指示詞と考えられることの多い語のうち、『孟子』に見える語について調査したものが図表1である。9語を資料対象とし<sup>9)</sup>、そして各語ごとに、資料総数を語法機能により「主語」、「定語」、「賓語」の三種に分類した。

ここでそれぞれの語において「非代詞及び引用」とあるのは、調査総数から、まず「代詞」以外の品詞の用例を除き、そして次に

〔是〕総数256 資料228  
非代詞及引用28

主語	131
定語	39
賓語	58

〔彼〕総数38 資料30  
非代詞及引用8

主語	19
定語	1
賓語	10

〔斯〕総数50 資料14  
非代詞及引用36

定語	14
----	----

〔図表2〕

（‘+’は該当語にその機能があることを表し，‘-’はないことを表す。）

	此	是	夫	彼	其	之	斯
主	+	+	-	+	-	-	-
定	+	+	+	-	+	-	+
賓	+	+	-	+	-	+	-

『孟子』一書のなかの通時的差異，例えば『詩』、『書』などの引用からの用例を除いた，という意味である。また，典籍からの引用であるという明確な記述がない場合でも，例えば孔丘，伊尹等がその発話者である場合は，それも直接話法と考え，除外した<sup>10)</sup>。以上を除いたものが資料総数である。

次にその結果を語法機能によって整理したものが図表2である<sup>11)</sup>。この表によって分かることは，まず「此」と「是」とは，語法機能が完全に一致するということである。「此」と「是」は，語頭子音の推定音価が破擦歯音 \*tsʰ-，歯茎硬口蓋音 \*tʃ- とそれぞれ異なることから考えても，同一語の別表記とは考えられず，つまり別個の異なる指示機能を有していたと考えるべきである。次に分かることは，「夫」は「定語」としてのみの機能を有し，「彼」は「主語」，「賓語」としての機能を有するということである。この「彼」と「夫」は，語頭子音の音価が \*p-，\*b- とともに両唇音であることから考えて，相補分布の関係にあると考えられる。

また「斯」は，「此」の定語と同様の機能を有するが，「此」と「斯」との混用は，先秦文献においては『孟子』特有の現象であるので，考察の対象から外した。また，「其」と「之」は指示性はなく，代替作用のみを有する「代名詞」の一種であると考えられるので，

これも考察の対象から外した<sup>12)</sup>。

よって以上を整理した結果，以下においては「此」，「是」，「彼」，「夫」の四語の指示機能について考えてゆくことにする。

### 3. 認識構造に関する仮説及び検証

#### 3.1. 認識構造に関する仮説

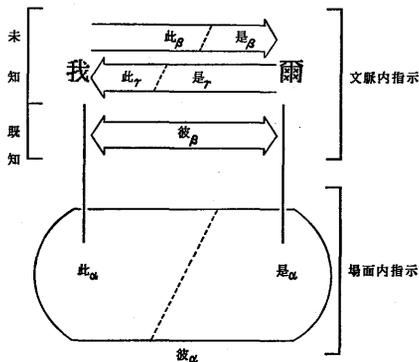
指示認識の構造に関する仮説を以下に示すことにする。論の展開からすれば，実際の用例から結論を帰納的に求めるのが順当であるが，ここでは用例の理解を容易にするために，仮説を先に立て，その後その検証を行いたいと思う。

ではまず，上古漢語の指示詞における指示

〔図表3〕

	主	定	賓
近	此	此	此
中	是	是	是
遠	彼	夫	彼

〔図表4〕



認識の構造についての仮説として図表3、及び図表4を挙げる。図表3は語法機能に関する仮説である。「近称」では、「主語」、「定語」、「賓語」ともに「此」を用いて指示し、「中称」では、「主語」、「定語」、「賓語」ともに「是」を用いて指示し、「遠称」では、「主語」、「賓語」を「彼」を用いて指示し、「定語」を「夫」を用いて指示すると考えられる。

図表4は指示認識の構造に関する仮説である<sup>13)</sup>。ここでは一人称を仮に「我」で表し、二人称を「爾」で表している。また「彼」は「夫」を同時に兼ねている。また発話時前後に述べたことを承けて指す「文脈内指示」を上段で表し、発話の場にあるものを直接指す「場面内指示」を下段で表している<sup>14)</sup>。

それから図表4中、それぞれの指示詞が指し示す事物がどういふものであるかを文章化したものが以下である。

- 〔此α：空間的、心理的に発話者の近くにあるもの。
- 此β：発話者が発話時以前に述べたこと。
- 此γ：対話者が発話時以前に述べたことで、発話者に身近に感じられること。
- 〔是α：空間的、心理的に対話者の近くにあるもの。
- 是β：発話者が発話時以前に述べたことで、対話者に既に伝わったと思われること。
- 〔是γ：対話者が発話時以前に述べたこと。
- 〔彼α：空間的、心理的に発話者、対話者両者から遠くにあるもの。
- 彼β：発話者、対話者両者ともに既知であると思われること。

### 3.2. 仮説に対する具体的な検証

前章において文章化した仮説を事例に沿って具体的に検証したものが以下である。

〔此〕

此α：王立於沼上，顧鴻雁麋鹿曰：「賢者亦樂此乎？」（梁上）

（梁惠王→孟軻<sup>15)</sup>；梁の惠王は自分の庭の池のほとりに立ち、雁や鹿の類いを眺めながら言った：「賢者もこうしたものを楽しむのだろうか？」）

ここでは「樂此」とあるが、これは目の前にいる「雁や鹿の類い」を指す「場面内指示」と考えられる。

此β：庖有肥肉，廐有肥馬，民有飢色，野有餓殍，此率獸而食人也。（梁上）

（孟軻→梁惠王；いま王様の調理場には肥えたるうまそうな肉があり、うまやには肥えた元気な馬がおりますのに、人民は飢えて顔色が青ざめ、郊外には餓死者の屍がころがっております。これは獣どもをひきつれて人を食わせているのとかわりありません。）

ここは発話者自身が発話時以前に述べたことを指し、なおかつ現実という身近な状況を指すのであるから、「此」を用いて指示したのである。「文脈内指示」と解釈する。

此γ：……凶年飢歲，子之民，老羸轉於溝壑，壯者散而之四方者幾千人矣。」曰：「此非距心之所得為也。」（公下）

（孔距心→孟軻；……不作や飢饉の年には、あなたの領地の民は、例えば老人や病人などは飢え凍えてみぞに転がって死んでおり、若者では食を求めて四方に散って逃亡する者が幾千人いるかわからないぐらいにひどいではないですか。）孔距心は答えて言う：「これはわたくし距心の為し得るところのものではありません。」）

ここでは、「此」を用いて、対話者が発話時以前に述べたことを指示するわけであるが、発話者自身に身近な現実の状況を指し、かつ発話者自身の管轄下のことを指すのであるから、特に「此」を用いて指示したのである。「文脈内指示」と解釈する。

〔是〕

是α：他日其母殺是賊也與之食之。其兄自外

至、曰：「是駢醜之肉也。」（滕下）  
 （陳仲子⇒其兄；ある日母親がそのガチ  
 ♫ウをしめて仲子に与えて食べさせた。そこへその兄が外から帰ってきて  
 言った：「それはガアガア鳥の肉だ  
 ぞ。」）

ここは、対話者が今実際に食べているガチ  
 ♫ウを指すのであるから、「是」を用いて指  
 示したのである。「場面内指示」である<sup>16)</sup>。

是β：仁則栄、不仁則辱。今悪辱而居不仁、  
 是猶惡湿而居下也。（公上）

（孟軻⇒；仁であれば必ず栄達するし、  
 不仁であれば他から恥辱をうけるもの  
 である。だからいま恥辱をうけること  
 をきらいながら不仁を続けるのは、そ  
 れは濡れることを嫌いながらわざわざ  
 低いところにある水溜まりにつかっ  
 ているのと同じことである。）

ここは発話者がすぐ前に述べたことを指す  
 わけであるが、対話者に伝えた、つまりもう  
 相手領域に属するという意識から、「是」を  
 用いて指示したと思われる<sup>17)</sup>。「文脈内指示」  
 と解釈する。

是γ：屋廬子不能對、明日之鄒以告孟子。孟  
 子曰：「於、答是也何有？」（告下）

（孟軻⇒屋廬子；屋廬子はそれに答える  
 ことができずに、翌日鄒に行つて、孟  
 子にそのことを話した。すると孟子は  
 言った：「ああ、それに答えることな  
 ど何でもないではないか？」）

ここは、対話者がすぐ前に述べたことを指  
 すのであるから、「答是」と「是」を用いて  
 指示したのである。「文脈内指示」である。

〔彼（夫）〕

彼α：牛山之木嘗美矣。以其郊於大國也，斧  
 斤伐之。……是以若彼濯濯也。（告上）

（孟軻⇒；牛山の木も嘗てはとても美し  
 かった。しかしそれが大都會の郊外に  
 あったために、斧斤でこの山の木をど  
 んどん切り倒していった。……そして

とうとうあのようにツルツルになつて  
 しまったのである。）

ここは、牛山が現実には孟軻の視界の遙か遠  
 くにそびえていたのか、或いは目の前には  
 実際には見えなかったかは分からないが、  
 とにかく孟軻、及びその対話者から遠くにあ  
 る具体的に存在するものを指すのであるから、  
 「若彼」と「彼」を用いて指示したのである。  
 「場面内指示」と解釈することにする。

夫α：子之道貉道也。……夫貉五穀不生，惟  
 黍生之。（告下）

（孟軻⇒白圭；君のやり方は、貉国など  
 でするやり方だ。……あの貉国では五  
 穀は生えず、そこにはただ黍が生える  
 だけだ。）

ここは、貉国が孟軻の実際の視界のなかに  
 ないわけであるが、遙か遠くにある具体的に  
 存在する国を心理的に指すと考え、一応「場  
 面内指示」と解釈する<sup>18)</sup>。

彼β：夷子曰：「儒者之道：古之人『若保赤  
 子』，此言何謂也？」……孟子曰：「…  
 …彼有取爾也。」（滕上）

（孟軻⇒夷之；夷子が言う：「儒者の言  
 うところ『書』康誥では、古の人は民を治めるには『母親が自分の赤子を保護するようにする』ということですが、この言葉はいったい何を意味するのでしょうか？」……孟子は言った：「……あの言葉は喩えるところがあってそのように言ったのである。」）

ここは夷之が前に引用した言葉を指示する  
 わけであるが、対話者が前に述べた言葉を指  
 すという意識ではなく、孟軻や夷之にとって  
 よく知られている言葉という意識で指すわけ  
 であるから、「彼」を用いて指示したと考え  
 られる。「文脈内指示」と解釈する。

夫β：王知夫苗乎？七八月之間，旱則苗槁矣，  
 ……（梁上）

（孟軻⇒梁襄王；王様はあの苗をご存じ  
 でしょう？ 七、八月の頃は、日照り

が続けば苗は枯れそうになりますが、  
……)

ここは誰もがよく知っている不特定の苗を指すのであるから、「夫」を用いて指示したと思われる。「文脈内指示」と解釈する。

以上基本的な用法を示したわけであるが、次に、それぞれの違いを明らかにさせるために、二種の指示詞を対比してその違いを述べてみたいと思う。

〔此・是〕

此是1. A：……不識有諸？」曰：「有之。」

曰：「是心足以王矣。」(梁上)

(孟軻⇒齊宣王；……このようなことが有りましたか？) 齊の宣王が言う：「確かにそんなことがあった。」 孟子が言う：「王様のそのお心で王者たるに十分なのです。』)

B：……夫子言之，於我心有戚戚焉。此心之所以合於王者何也？(梁上)  
(齊宣王⇒孟軻；……先生がおっしゃると、確かに自分の心に思い当たるものがある。ところで私のこの心で王者たるに十分であるという理由はいったい何だろうか？)

このA、Bは孟軻、齊宣王による同一章の中での連続したやりとりである。A文中の「是心」は、上述のような心という解釈も可能であるが、実際に指しているのは対話者である齊宣王の心であることから、「是」を用いて指示したと思われる。一方、B文中の「此心」は、齊宣王が自身の心を指すのであるから、「此」を用いて指示したと思われる。もしこの「是」と「此」とが、誤って入れ替わってしまったとすれば、ここで説明されている「王者たるに十分な心」は孟軻の方に近づき過ぎてしまうこととなり、齊宣王は上述の心を、自分から一旦突き放して客観的に見ているような印象を与えてしまい、本文の内容とそぐわないものになってしまうのではないだろうか？

此是2. A：……或百步而後止，或五十步而後止，以五十步笑百步，則何如？」  
曰：「不可。直不百步耳，是亦走也。」曰：「王如知此，則無望民之多於鄰國也。」(梁上)

(孟軻⇒梁惠王；……或る者は百歩逃げて踏み止まり、或る者は五十歩逃げて踏み止まった時に、五十歩しか逃げなかったという理由でその者が百歩の者を笑ったとしたらどうでしょうか？」梁の惠王は言う：「それはよくない。ただ百歩逃げなかっただけで、そいつもまた逃げたのには違いがないのだから。」 孟子は言う：「王様ももしこのことをお分かりでしたら、隣国よりも人民が多いことを望むわけにはいかないのです。』)

B：……昔者竊聞之，子夏・子游・子張皆有聖人之一体，冉牛・閔子・顔淵則具體而微。敢問所安。」曰：「姑舍是。」(公上)

(孟軻⇒公孫丑；……以前聞いたことですが、子夏・子游・子張はいずれも聖人としてのある一面を備えており、冉牛・閔子・顔淵のほうは聖人としての徳を確かに備えてはいるけれどもそれはわずかであるとのことでした。失礼ですけれども先生はこれらのうちどなたくらいにあたるかお聞きしたいのですが。」 孟子は言う：「しばらくそのことは措いておくことにしよう。』)

A、Bともに、前の言葉を指示しているわけであるが、A文中の「知此」は、自分が持ち出した話題を承けているので、「此」を用いて指示しているのである。一方、B文中の「舍是」は、対話者が持ち出した話題を承けているので、「是」を用いて指示しているの

である。

此是3. A：民之憔悴於虐政，未有甚於此時者也。（公上）

（孟軻⇒公孫丑；人々が虐政に憔悴していることは、いまこの時より甚だしいことはない。）

B：当是時也，禹八年於外，三過其門而不入。（滕上）

（孟軻⇒陳相；その当時，禹は我が家を外にすること八年，三たび自分の家の門の前を通り過ぎたが忙しくて立ち寄ることができなかった。）

A文中の「此時」は、発話者に身近な現実を指示する、という意識から、「此」を用いて指示したと思われる。一方、B文中の「是時」は、相手側に既に伝えたある「お話し」のなかの時間を指示する、という意識から、「是」を用いて指示したと思われる。

〔此・彼〕

此彼1.：孟子去齊，充虞路問曰：「夫子若有不豫色然。前日虞聞諸夫子，曰：君子『不怨天，不尤人。』」曰：「彼一時，此一時也。」（公下）

（孟軻⇒充虞；孟子がとうとう齊を去るという時，充虞が道の途中で尋ねた：「先生はなんとなく浮かない顔をしていらっしゃいますね。以前先生は、『論語』〔憲問〕に君子というもの『天を怨んだり人をとがめたりしないものだ。』とあるとおっしゃったではないですか。」孟子は言う：「孔子のあの時代も一つの時代であるし、いまのこの時代も一つの時代である。」）

この文では、まず発話者，対話者両者から遠く離れている時間を「彼」を用いて指示し，次にその二人がいる時間を「此」を用いて指示したと思われる。

此彼2.：徒取諸彼以與此，然且仁者不為。況

於殺人以求之乎？（告下）

（孟軻⇒慎子；ただ単にあちらからものを取り上げてこちらに与えるということ，それすらなお仁者は恥じてしないものです。ましてや人を殺してまで領地を求めようとしてそれでどうしてよろしいでしょうか？）

この一文は，ただ単に，甲から取り上げて乙に与える，という意味ではなく，自分に遠い他人から取り上げて自分に近い身内に与える，という意味ではないだろうか？

此彼3.：『春秋』無義戰。彼善於此則有之矣。（尽下）

（孟軻⇒；『春秋』には正義の戦いというべきものはひとつもない。ただあちらのほうがこちらよりはいくらか善いというものはある。）

この文も，ただ甲のほうが乙より善い，という意味ではなく，以前に読んだある部分のほうが，今現在読んでいるところよりは善い，という意味に取るべきである。

#### 4. 結語

以上『孟子』を資料として記述を行った。本稿で記述されたものは上古漢語のうちの紀元前4世紀から3世紀にかけての齊魯方言であると考えている<sup>19)</sup>。

これまでの論証に誤りがないとすれば，長きに亘って懸案とされてきた「此」と「是」との使い分けという問題に対して，「その使い分けは，ある特定の時期，地域においては三分認識のうちの近称と中称との違いである」という解釈によって一応の解答が提出できたと言えるのではないだろうか。

またこの「二分認識」，「三分認識」（或いはこれらと異なった認識形態）という構造の相違は，漢語，特に先秦以前の様々な文献の系統を考えてゆくうえでの一つの手掛りとなりうると思われる。そして延いては東アジア諸語の系統を考えるうえでも，或いはその解

明の一つの糸口となるかも知れない。

それからここで問題となってくるのは、例えば「三分認識」であるというように認識構造は一致しても、さまざまな言語においてその語用何らかの差異を有するということがある<sup>30)</sup>。現代漢語諸方言における認識のありかたも含めて、さまざまな言語の諸相については、これからの課題としたい。

(一九八九年三月)

〈注〉

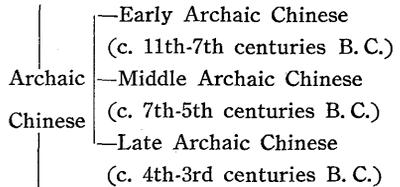
- 1) 例えば Bloomfield 1933 (1984), pp. 258-259 において、既にスコットランド方言やラテン語の三分認識をはじめとして、さまざまな言語の、多様な認識形態が記述されている。
- 2) 例えば張志公 1953, pp. 164-165 を参照。
- 3) 佐久間 1951, pp. 22-23 を参照。
- 4) 「兩分法」, 「三分法」の「法」は、日本語においては 'mood' の訳語として、例えば「接統法」のように使われるため、本稿ではこの言葉を「二分認識」, 「三分認識」と訳した。
- 5) 原文は以下の通り。
  - (1) “於是”(用于句首), “自是……”表示時間。
  - (2) “於此”, “至此”, “及此”等表示地点或地歩。
  - (3) 表示人用“是”, 用“此”是特殊情形。
  - (4) “是”“此”在時間詞的前頭有些區別;
    - ・“是”表示“當時”, “此”表說話的“今時”。
    - ・“此”要是表“當時”, 要用于“當”字, “於”字後。
    - ・“是”加在時間詞前頭, 一般都不是近指。
- 6) アルタイ諸語の影響で二分認識になったかどうか、の是非は今ほ措くことにする。また Ogawa 1980 を承けた馮蒸 1983, 1987 は、俞敏 1949, 1981の考えをもとに、

チベット語との比較から、古代漢語は近指“時”, 中指“是”, 遠指“夫其(彼其)”(それぞれチベット語の 'di, de, phagi' に対応)の三分認識であるとしているが、この考えは極めて慎重な論証を経た後でなければ、広範な承認は得難いと思われる。

7) 通時的区分を図式化すると以下のようになる。

⋮

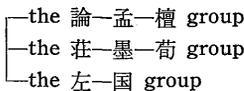
Oracular Chinese



Han Chinese

なお 'Late Archaic Chinese' に設定した理由は、Dobson 1959, p. xv に指摘されるように、この時期は後の時代において規範とみなされている文献が比較的多いと思われるからである。

8) 共時的区分を図式化したものが以下である。



'the 論—孟—檀 group' に設定したのは、太田1984, p. 192 に述べられているように、該方言は他資料に比べて後の時代において規範性が強いと思われるからである。

- 9) 「諸」, 「焉」, 「若」, 「然」, 「爾」等は合音字であると考えられるので、別に論じることとして、本稿では触れなかった。また「者」, 「所」の解釈の仕方についても、同様触れなかった。
- 10) 該書の共時的差異、例えば楚の陳良の弟子の陳相や、梁の襄王を発話者とする場合については、今回はそれらまでを厳密に除

- 外することはしなかった。それは、『孟子』執筆者がそこまで共時的差異を意識していたか疑問であるし、またそこまで除外してしまうと資料が激減してしまい、資料としての機能を果たさなくなるからでもある。
- 11) 「茲」、「厥」は『孟子』において既にその用法は衰退していたと考えられるので、語法機能の考察の対象から外した。また語法機能における数値が2以下のものも、そこに含まれる資料を破格と考え、同じく対象から外した。
- 12) 「此」、「斯」の混用については、黄盛璋 1983, p. 146 を参照。厳密に言えば、『詩経』においても混用の傾向がある。代替作用については Dobson 1974, p. 87 を参照のこと。この二つの問題については、それぞれ別稿を用意している。
- 13) 図表4及びそれに付随する簡条書きについては佐久間 1951, pp. 22-23, 鈴木重1972, pp. 193-197 を参考とした。
- 14) ある指示詞の指示が「文脈内指示」であるか、「場面内指示」であるかを、必ずしも厳密に区別できない用例が幾つか存在する。よってこの区別は、あくまでも原則的な概念であることをここに付言する。なお指示認識そのものに関する考察は、讚井 1988において、先行研究の紹介とともに詳しく論じられている。
- また三上 1972, pp. 170-189 等によれば、中称と遠称とが同時に認識構造のなかに存在することはないということであるが、例えば『莊子』内篇、齊物論に「物無非彼、物無非是。……故曰：彼出於是、是亦因彼。彼是方生之說也。」とあることを考え合わせると、この問題はさほど簡単に解決のつくものではなさそうである。よって本稿では「待考」ということにしておきたい。ちなみに『孟子』だけに限って言えば、後の挙例の如く、確かに「是」と「彼」が対立して現れることはない。
- 15) 「甲→乙」は、甲が発話者、乙が対話者であることを表す。なお乙が空欄の箇所は、対話者を特定できないことを表す。
- 16) 「是賊」の「是」の方は、前を承けての用法、即ち「是β」に属すると考えられるので、ここでは論じない。
- 17) ここは、「是」を系詞と解釈することも可能であるが、ここで用いられている「是」は、指示性がなお強いと考え、「指示詞」と解釈した。指示詞から系詞への変遷については、潘允中 1982, pp. 194-199 に詳しい。
- 18) 「夫」には、物事を説き起こす際に用いる語気詞としての用法もあるが、ここは定語として限定していると解釈し、指示詞と見なした。
- 19) 今回の記述は、あくまでも上古漢語のうちの一つの例を示したに過ぎないのであって、この結果が全ての上古漢語の構造を代表し、そして全ての上古漢語に適應できるとは考えていない。
- 20) 上古漢語と日本語の指示詞における差異について言えば、例えば日本語でこれから言及するものを指示する場合、「以前こういうことを聞きました」と「こ」を用いるのに対し、上古漢語では、「昔者竊聞之」(『孟子』公上)と代替作用を持つ「之」を用いて指示することが挙げられる。濱田 1970, pp. 183-206 につとに指摘されるように、ともに三分認識であると言われている日本語と朝鮮語の指示詞についても、幾らかの差異が認められる。ともに二分認識である中国語と英語、及びフランス語においても、既に王力 1945, pp. 48-49 にその差異が指摘されている。

#### 文献目録

- Bloomfield, L. 1933. *Language*. New York: Henry Holt and Co.. [Chicago: University of Chicago Press Edition, 1984.]

- Dobson, W. A. C. H. 1959. *Late Archaic Chinese*. Toronto: University of Toronto Press.
- 1974. *A Dictionary of the Chinese Particles (Prolegomenon)*. Toronto: University of Toronto Press.
- 馮蒸1983. 「關於漢藏語系空間指示詞的幾個問題」, 『均社論叢』13, 1-19頁。
- 1987. 「古漢語語法研究與漢藏語比較」, 『文字與文化叢書』(二), 195-198頁。北京: 光明日報出版社。
- 濱田敦1970. 『朝鮮資料による日本語研究』。東京: 岩波書店。
- 黃盛璋1983. 「先秦古漢語指示詞研究」, 『語言研究』第5期, 136-157頁。
- Karlgren, B. 1951. "Excursions in Chinese Grammar", *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 23, 107-133.
- 松下大三郎1930. 『標準漢文法』。東京: 中文館書店。
- 三上章1972. 『現代語法新説』。東京: 刀江書院。
- Ogawa, T. 1980. "Demonstratives in the Suzhou Dialect", *Computational Analyses of Asian & African languages*, No. 13, 149-151.
- 太田辰夫1984. 『古典中国語文法(改訂版)』。東京: 汲古書院。
- 潘允中1982. 『漢語語法史概要』。河南: 中州書畫社。
- 佐久間鼎1951. 『現代日本語の表現と語法』。東京: 恒星社厚生閣。
- 讚井唯允1988. 「中国語指示代名詞の語用論的再検討」, 『東京都立大学人文学報』198, 1-19頁。
- 鈴木直治1981. 「“此”について」, 『金沢経済大学論集』15-2, 155-181頁。
- 1982. 「指示詞としての“是”について」, 『金沢経済大学論集』16-1, 401-423頁。
- 1983 a. 「“彼”について」, 『金沢経済大学論集』16-2・3, 105-133頁。
- 1983 b. 「“夫”について」, 『金沢経済大学論集』17-2, 89-139頁。
- 鈴木重幸1972. 『日本語文法・形態論』。むぎ書房。
- 王力1945. 『中国語法理論』(下)。重慶: 商務印書館。
- 1981. 『古代漢語(修訂本)』(第一冊)。北京: 中華書局。
- 俞敏1949. 「漢語的“其”跟藏語的 gyi」, 『燕京學報』第37期, 75-94頁。
- 1981. 「漢藏兩族人和話同源探索」, 『北京師範大學學報』(社會科學版) 第1期, 45-53頁。
- 張志公1953. 『漢語語法常識』。北京: 中國青年出版社。
- 周法高1954. 『中国古代語法(稱代編)』(中央研究院歷史研究所專刊之三十九)。台北: 中央研究院歷史研究所。

## 〔付記〕

本稿は1988年10月30日の中国語学会第38回全国大会(於神戸市外国語大学)における発表に加筆訂正したものである。

\*発表の際, 山口大学の平田昌司先生(現京都大学), 神戸大学の木村英樹先生, 京都産業大学の中川千枝子先生からまことに貴重なご教示をいただきました。またその時司会をしていただきました文教大学の牛島徳次先生には, 未見資料の提供をはじめとして, ひとかたならぬご指導を賜りました。ともに此に識して感謝の意を申し述べます。